

commons: schola vol. 4
Ryuichi Sakamoto Selections: Ravel
原典解説



曲名: 水の戯れ
アルバム名: デビュー・リサイタル

演奏者名: マルタ・アルゲリッチ (ピアノ)
録音: 1960年7月 ハノーファー

CD番号: UCCG-4627
発売元: ユニバーサル ミュージック合同会社

(schola vol.4 CD track 1)

1900年頃、パリの街に「アパッシユ(ごろつきども)」と名乗るユニークな集団が出没し始めた。文学・美術・音楽など幅広い分野にわたって前途有望な若手芸術家たちを集めたこのグループは、保守的な勢力に抵抗し、新しい芸術作品を熱心に擁護して、20世紀初頭の文化の動向に多大な影響を及ぼすことになる。そのメンバーの中に、まだ学生であった若き日のモーリス・ラヴェルの名前があった。

は自らのスタイルを確立させていく。その中から生まれた《水の戯れ》は、彼の個性が明確に刻印された最初のピアノ曲といえる。ラヴェルより13歳年上のクロード・ドビュッシー(1862～1918)は、出世作《牧神の午後への前奏曲》以降、西洋音楽の伝統的な形式感覚と決別し、瞬間ごとの響きが次の響きを生み出すような、自在な音楽を指向していった。それに対してラヴェルの《水の戯れ》は、ベートーヴェンのピアノ・ソナタを思わせる、2つの主題に基づく自由なソナタ形式を採用する。情景描写的なタイトルを持ち、

洗練された感覚で斬新な和声を随所に盛り込みつつも、それら全てを古典的な美学で包み込んでしまうところに、彼の創意があるのだ。古典音楽への憧れと接近は、後年の作品にも多様な装いをまとってあらわれる。

マルタ・アルゲリッチ(1911～)は、豊かな音楽性と天才的なひらめきを備えた、現代を代表するピアニストの一人である。弱冠19歳のときに録音した、《水の戯れ》を含む彼女のデビュー・アルバムは、切れ味鋭いテクニクと湧き立つような生命感で、いまだに鮮烈な印象を与えてくれる。